

エコクリティシズムから読む
アメリカ文学のジェンダーと人種

吉 田 美 津
伊 藤 詔 子
辻 祥 子

松 山 大 学
言語文化研究 第28巻第2号 (抜刷)
2009年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 28 No. 2 March 2009

エコクリティシズムから読む アメリカ文学のジェンダーと人種

吉 田 美 津
伊 藤 詔 子
辻 祥 子

はじめに

1990年代エコクリティシズムはアメリカ文学批評における人種、ジェンダーそして階級という従来のテーマに環境という視点を導入する批評として注目をあびるようになった。エコクリティシズム誕生の背景には19世紀のヘンリー・デイビッド・ソローにさかのぼるネイチャーライティングの文学的系譜がある。さらにアメリカを「処女地」と捉える「楽園」志向の歴史文化的な表象変容の研究が、ピューリタン研究から1960年代のレオ・マークスの『楽園と機械文明』やヘンリー・ナッシュ・スミスの『ヴァージン・ランド』などの研究にまで継承されている。歴史的にみればフレデリック・ジャクソン・ターナーの古典的研究「アメリカ史におけるフロンティアの意義」(1893)や「アメリカ民主主義に対する西部の貢献」(1903)は民主主義体制が歴史的闘争の帰結ではなくフロンティア精神による空間の占有という場所の移動によって達成されたことを示している。このような自然／環境との特殊な歴史文化的関係を通じてアメリカのナショナルな風景は構築されてきた。したがって文学と環境の関係を研究すると広義に定義されるエコクリティシズムはすぐれてアメリカ的な文学批評といえる。

現在、人間社会と自然を二つの異なる領域を自明として、主にネイチャーラ

イテイングを批評対象としてきた初期エコクリティシズムは、世界的な環境汚染の悪化にともなって批評対象をアメリカの主流文学、マイノリティ文学、劇、詩など多様なジャンルを対象とする環境批評へと変化している。本論考は以上のエコクリティシズムのダイナミックな変容に注目し、自然をめぐる新しい文学的環境表象をジェンダーや人種の視点から19世紀から現在にいたる文学において明らかにすることを目的としている。第I章「フレノー、ホーソン、ポーが描く埋葬の物語——先住民と白人の死生観の比較」(辻)は、フレノーの詩「インディアンの墓地」に示される白人と先住民の死生観の違いを、ホーソンの短編「ロジャー・マルヴィンの埋葬」とポーの「早すぎた埋葬」の死者のとり姿勢の違いにおいて読み解く。白人の埋葬にみられる生者と死者の峻厳な区別は先住民の埋葬方法と比較され、ホーソンとポーの作品における死生観のインターエスニックな表象をうかびあがらせる。

第II章「チャイナタウンをめぐる場所の記憶とエスニシティ——キングストンの作品を中心に」(吉田)は、中国系作家キングストンの作品にアメリカ文化に根強くある領土拡張主義的な志向とは異なる共同体意識をエスニック・コミュニティの意義として読み解く。土地を自由に所有できなかった初期の移民の歴史を前景化しながら、キングストンの環境的想像力が中国系の歴史と文化に根ざすチャイナタウンの再生から平和を希求する人びとが作りだす脱領土的な新しい共同体の創造へと変容していく過程を明らかにする。第III章「汚染の言説と環境文学——Susanne Antonetta, *Body Toxic: An Environmental Memoir*を中心に」(伊藤)は、このメモワールが著者アントネッタ自身の病んだ身体を中心に彼女の4世代移民の歴史とその背景のアメリカ史を交差させることによって、人と家族と国家が汚染(物質)によって結合していることを論じる。身体に深く浸透する汚染を、「汚染の感覚の内面化」と捉えパストラルな自然観にみいだせる自己と自然との一体化がもはや不可能な状況を示唆する。このような新しい視点により論じられるこれらの論考はエコクリティシズムが環境批評へと批評対象と問題意識を広げつつある最新の研究状況を如実に示してい

る。(吉田美津)

I フレノー、ホーソン、ポーが描く埋葬の物語 —— 先住民と白人の死生観の比較

辻 祥子

1787年、アメリカ初の月刊紙 *The American Museum* の中に、合衆国憲法のフルコピーとともに、先住民の死をテーマにした3篇の詩が掲載される。題名はそれぞれ「あるチョロキー族インディアンの死の詩」(“The Death Song of a Cherokee Indian”)「死にゆくインディアン」(“The Dying Indian”),そして「インディアンの墓地」(“The Indian Burying Ground”)である。バーグランド(Renée L. Bergland)の解釈にあるように、そこには共和国の幕開け、アメリカの啓蒙運動の展開とともにインディアンは闇に消える、というメッセージが読み取れる(41)。しかし本稿では、3つ目に挙げた「インディアンの墓地」の特殊な視点に注目したい。著者はニューヨーク生まれで、フランス系の詩人フィリップ・フレノー(Philip Freneau, 1752-1832)である。この詩が、単にインディアンの死を描いたものではなく、埋葬の仕方にも言及し、白人と先住民のそれぞれ対照的な死生観を捉えていることを明らかにする。さらにこうした死生観の違いは、19世紀に入って、ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-1864)の「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(“Roger Malvin’s Burial”, 1831)やエドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809-1849)の「早すぎた埋葬」(“Premature Burial”, 1844)といった作品にも効果的に用いられていることを指摘したい。さらに、ここでフレノーたちが認識していた白人と先住民の死生観の特徴は、文化人類学的にも正しいものであることを、いくつかの資料によって裏付ける。

1. フレノーの詩：白人と先住民の埋葬と死生観の違い

まず、フレノーの詩の前半部分から、特に埋葬の姿勢、そして死に対する解釈について、白人と先住民の違いが描かれているところを引用したい(Bergland 39-40)。

「インディアン墓地」(オリジナル版「古きインディアン墓地を訪ねて」)

学者たちが何と言おうと、
私は、私の持論に執着する。
我々が死者を横たわせるのは、
それが魂の永遠の眠りを示しているからであると。
しかし、この持論はこのあたりの土地の先祖たちには当てはまらない。
インディアンは、生きることから解放されると、
ふたたび、友人たちと座って、
楽しい食事を分かち合うのである。

彼のために、鳥の彫像が作られ、
鉢に盛られた鹿肉が描かれる。
というのも、これから美しく着飾って死出の旅に出かけるわけだが、
それは魂の活動であり、決して休むことはないのだ。

彼の弓は、すでに攻撃に備えてしなり、
矢の先には骨の矢尻がついている。
それは、命は潰れても、
それより立派な魂は残るということを示している。

この道をやってきた、見知らぬ人よ、

死者に対してごまかしはいけない。

しかし盛り土を見て、こう言うがいい。

彼らは横たわってはいない、ここに座っているのだと。

詩にはこれから後半にかけて、先住民の亡霊たちがいろいろな姿で森の中に登場する光景が描かれるが、あえてこの前半だけに注目すると、「私」つまり白人にとって、埋葬の姿勢とは横たわった状態であり、それは決して覚めない「永遠の眠り」を示している。しかし先住民にとって、埋葬は生前と変わらぬ座った姿勢で行われ、死んでからも魂は残って、楽しく食事をし、死出の旅路の準備をするのだという。

2. ホーソンとポーの描く「横たわらない」死体

ここで興味深いのは、白人が、通常の横たわった状態で埋葬されず、座ったり立ったりという姿勢で屍になるという設定が、19世紀に入ってホーソンやポーの作品の中に意図的に用いられていることである。ホーソンは、17世紀のピューリタンの青年ルーベン（Reuben Bourne）を主人公にした短編「ロジャー・マルヴィンの埋葬」を1831年に発表している。ルーベンは、婚約者の父マルヴィンとともに対インディアン戦争を経験し、途中で致命傷を負ったマルヴィンを森に置き去りにしてもとの村に戻るのだが、その後きちんと埋葬されずに死んでいったマルヴィンの姿を想像しては苦しみ続ける。ここで、死ぬ間際のマルヴィンの姿というのが重要になる。マルヴィンはルーベンに、おまえだけでも助かって、娘と幸せな家庭を作れと言うのだが、別れ際にわざわざ青年をもう一度呼び止めて、それまで横たわっていた自分の体を起こしてくれと頼む。できるだけ長く青年の姿を見送りたいというのがその理由なのだが、途中で青年は再度戻ってきて、今度は物陰から義父の様子を伺う。それゆえ、青年の脳裏に、座って祈りをささげている義父の姿が焼きつき、それは永遠に拭い去ることはできないのである。座ったまま死んでいく人間の姿は、ル

ーベンにとって恐怖以外の何ものでもない。

ホーソーンと同時代のポーは、「早すぎた埋葬」の中で、死んだと勘違いされ埋葬された人間が墓の中で意識を取り戻し苦しむ様子を、いくつもの例を挙げて描写し、読者の恐怖を増幅させていくが、作品冒頭にはとくにショッキングな「瞠目の例」(114)を紹介している。生きながら埋葬された人間が結局救出されず、ついに本当に息絶えてしまうのは、この例だけなのだが、問題はそのときの姿である。被害者となるその女性は棺から這い出たはいいが、棺が納められている大きな地下の墓所からは出られず、結局墓所の扉のところで、立ったままの姿勢で屍になる。ホーソーンがルーベンをあえて座ったまま死なせるため、特別な設定をしたのと同様、ポーもここで巧みな仕掛けを仕組んでいる。その女性は墓所の「鉄の扉をたたいて外の人間に気づかせようとしたと思われる。そんなことをしながら恐怖のあまり気絶したか、あるいは息が絶えたのか、いずれにせよ倒れる際に、扉の内側に出ていた鉄の部品に装束が引っかかった。こうして立ったまま朽ちていったのである」(115)。本来、横たわっているはずの死体が生者と同じように立っている。立っているだけではない、3年ぶりに墓所の扉を開けた夫の様子は次のように語られる。「扉に手をかけた夫を待ち構えていたのは、いかなる恐怖の衝撃であったろうか。両開きの戸が開かれると何やら白く装ったものが、夫の腕の中へがたがたと倒れこんできた。妻の骸骨だ。死装束は腐っていなかった」(114-115)。このときの夫の恐怖は、さきほどのルーベンの恐怖と本質的には同じと考えられる。

3. 文化人類学的な裏づけ

そこで我々には疑問が生じる。ホーソーンやポーが描くように、横たわっていない遺体は、白人になぜこれほどまでに恐怖を与えるのか。一方でフレノーが描くように、先住民の遺体はなぜ座った姿勢で楽しそうなのか。この疑問を解くために、初めに白人の宗教と死生観から考えたい。ポーの両親は、スコッチ・アイリッシュ、ホーソーンの祖先はピューリタン、フレノーの父親はユグ

ノー（フランス系カルヴィン派）であり、3人ともプロテスタントの影響が強いといえる。そこでまずはピューリタン、広くはプロテスタント、さらにはカトリックを含むキリスト教一般の死生観を見ていく。

エール大学の歴史学者、デイヴィッド・E・スタナード（David E. Stannard）は、「埋葬の儀式の意味は、文化によって違い、また、生きることと、死んだ後のことをどう考えるか、あるいは生から死へと向かおうとしている時期をどう捉えるかによっても変わってくる。」(97)と述べて、とくに、ピューリタンたちの死生観と儀式に対する態度に注目している。彼らは、カトリックの考えるような煉獄(天国に行くため、軽微な罪を浄化する場所)の存在を認めなかったため、自らの死が近づくと神の審判に対する恐怖を募らせ、極度の緊張を強いられるのであった(72-95)。同時にピューリタンは、死者が煉獄で苦しむ期間を短くするために行うというカトリックの祈りや儀式(88-89)を否定する。彼らは、生者(特にカトリック最高権威としての教皇)の力が死者にも及ぶことを断固として認めないのである。「我々は、死者のことは死者に任せ、生者は生者で生きなければいけない」(103)というピューリタン聖職者の言葉は象徴的である。さらに彼らは葬式や墓の碑文も極めて簡素なものを望んだ。ピューリタンがアメリカに渡っても、こうした態度は変わらなかった。インディアンを改宗させるとき、彼らの埋葬の儀式も禁止したという(109)。スタナードはピューリタンに特化した書き方をしているが、煉獄を否定し、あの世とこの世を完全に切り離す考え方はプロテスタント一般に共通している。こうみても、プロテスタントは、生者が死者の運命に影響を与えるか否かをめぐって、カトリックと見解を大きく異にすることがわかる。しかしながら、プロテスタントにせよ、カトリックにせよ、逆のベクトル、つまり死者が生者の生活に影響を与えることは許さない。死者はこの世の次元では「永遠の眠りにつく」のである。

こういったキリスト教の死生観と、フレノーの詩に書かれたような、死者を横たわらせることで、生きている者と区別する白人の心理とは符号する。また

ホーソンやポーの作品では、荒野に座ったままの兵士の死体や、墓所の扉のところで立ちつくし、扉を開けたとたん、こちらに襲い掛かるように倒れこんできた女性の死体が描かれていたが、それは死者がタブーを犯して生と死の境界を越境してくるような錯覚を抱かせるという意味で、白人の登場人物や読者にこの上ない恐怖を与える効果を持っている。

一方、先住民の死生観はどうであろうか。スタナードは特定の先住民の死後の世界が極めて曖昧であり、彼らがひとえに死や死体を忌み嫌うことを指摘するに留めているが、この分析では正確とはいえない。H. C. ヤロウ(H. C. Yarrow)は複数の研究者による調査報告を『北米インディアンの埋葬の習慣』(1878)と題する書物にまとめ、その中で、死後、魂が旅を続けると信じている部族が多いことを例証している。たとえばカリフォルニアのラウンド・ヴァリー・インディアン (the Round Valley Indians) は、埋葬の穴に死者が生前使っていたものすべて、またはそれ以上の多くのお供えものを入れるという (Yarrow 19)。同じく死者の家の下に埋葬する習慣のあるカロライナのマスコガルジェ族 (the Muscogulges) も、銃や斧、パイプ、その他故人が生前大切にしていたいろいろなものを入れる (18)。その他の部族でも、遺体に晴れ着を着せる習慣や死者に食事を与えるケースがある (8)。それが死出の旅路に必要な準備であると信じられているのである。またネブラスカのサック族 (the Sacs)、フォックス族 (the Foxes) は、死んだ者は大きな川に到着し、生前正直であれば向こう岸を渡ることができ、神に、古い頭脳と新しいのを入れ替えてもらったあと、幸せな狩猟の地に到着して永遠の生活を送ることができると信じている。悪人なら川に落ちて永遠に無になるという (4)。こう見てくると、多くの先住民は死後の世界を想定しているといえる。先に引用したフレノーの詩で、先住民の墓には食べ物の絵が描かれ、狩りの支度を整えられているのは、まさにこのような死生観を反映しているとわかる。

しかし、ここでキリスト教徒の死生観との決定的な違いに注目したい。先住民の場合、生者が死者の魂に働きかけるだけでなく、死者もこの世に戻ってき

て、生者に影響を与えるのである。たとえば、北部のイロコイ族 (the Iroquois) の場合、故人の魂は死後も体に近いところで留まったり、ふたたび体内に戻ると考えられ、そのため墓には予め穴が開けておかれるという。また、死後 10 日目には、空腹の魂がもとの家に帰って食事ができるように宴会が開かれる。それでも家の付近から去ろうとしない魂のために、一年後も同じような宴会が催される。その後も、そうやって未練がましく漂う魂が、食料や仲間を求めて、生者の夢の中に現れたり、病気や不幸をもたらしたりしないよう、歌や食事とその魂を慰める特別な儀式があるという。(Wallace 99)

このように死者が生と死の世界を自由に行き来でき、生者もそれと交流できるという先住民の発想を理解すれば、先住民の文化圏では、死者を葬るとき、必ずしも横たわらせて、永遠の眠りにつかせる必要はないというのも理解できる。立った形あるいは座った形で埋葬される部族の例がかなりある。

ニューヨークのモホーク族 (the Mohowarks) の場合、大きな丸い穴が掘られ、遺体は「立ったまま」(“upright”) あるいは、「しりもちをついた状態で」(“on one’s haunches”) 置かれる (Yarrow 2)。フロリダのクリーク族 (the Creeks) やセミノール族 (the Seminoles) の場合、死者は「座った姿勢で」(“in a sitting posture”), 足は曲げた状態で縛られ、その上から毛布を巻かれて埋葬される (4)。似たようなケースだが、アリゾナのピーマ族 (the Pimas) は、人が死ぬと「無理やり座った形にして」(“forced into a sitting position”), ロープで結ぶ (6)。もっと自然な形として前述のマスコガルジェ族の場合、死者は、「まるで生きているかのように座った状態で」(“in a sitting posture as if it were alive”) 穴の中に安置される (19)。またイリノイのサック族やフォックス族は、地面に掘られた浅い穴に「座った姿勢で」(“in a sitting posture”) 埋められる (29)。腰から上、つまりからだの大部分は、地上に出ており、その部分はバッファローの毛皮の服で覆われるという。これは、地表埋葬 (surface burial) と呼ばれる。先に紹介したイロコイ族も「ひざを抱え込むような座った格好で」(“seated with knees drawn up under the Chin”) (Wallace 99) 地表埋葬されるこ

とが確認されている (Yarrow 29)。

また、ミイラにして生前にできるだけ近い状態で保存する部族もある。ケンタッキーの洞窟などではミイラが、「座ったり」 (“in a sitting posture”), 「うずくまった姿勢で」 (“in a squatting posture”) (24) 見つかっている。また北西海岸の調査で発見されたミイラで、富裕層のものは、服を着せられ、ときには武装させられ、「まるで生きているかのような姿勢で」 (“in a lifelike position”) 埋葬されている。つまり故人が生前狩りや魚釣りや縫い物に親しんでいたら、そのままの服装、そのままの体勢でミイラにされているのだ (26)。

このように、実際の先住民の埋葬からも、彼らが死と生の間に厳格な線引きをおこなわず、死者によるこの世への越境をおおらかに捉えていることがわかる。

以上、白人 (ピューリタン) と先住民の死生観や埋葬の仕方の違いを、フレーノ、ホーソー、ポーの作品の中に読み取り、その文化人類学的な裏づけを行った。このテーマは、おそらくその他の文学の中にも散見でき、研究の余地は大いにあると考えられる。

引用文献

- Bergland, René L. *The National Uncanny: Indian Ghost and American Subject*. Hanover: Up of New England, 2000.
- Hawthorne, Nathaniel. *Nathaniel Hawthorne's Tales*. New York: Norton, 1987.
- Poe, Edgar Allan. *The Complete Tales & Poems of Edgar Allan Poe*. New York: Modern Library, 1938. (引用は小川高義訳『黒猫／モルグ街の殺人』光文社, 2006 により頁数を記した。)
- Stannard, David E. *The Puritan Way of Death: A Study in Religion, Culture, and Social Change*. New York: Oxford UP, 1977.
- Wallace, Anthony F. C. *The Death and Rebirth of the Seneca*. New York: Vintage Books, 1967.
- Yarrow, H. C. *North American Indian Burial Customs*. Ogden: Eagle's View Publishing, 1879.

Ⅱ チャイナタウンをめぐる場所の記憶とエスニシティ —— キングストンの作品を中心に

吉田美津

1. 「^{アメリカ}金山」からチャイナタウンへ

中国系作家マクシン・ホン・キングストン (Maxine Hong Kingston, 1940-) にとって場所は重要な意味をもっている。それはアメリカ文学研究における概念「フロンティア」や「明白な運命 (Manifest Destiny)」の背景にあるアメリカ膨張主義的な意味合いにおいてではなく、移民の歴史を背景にエスニック・コミュニティの重要性を展開する点においてである。アジア系文学の存在をアメリカ社会が認知する道を開いた『チャイナタウンの女武者』(今後『女武者』と表記。 *The Woman Warrior*, 1976) は、中国人であり医者であった母親の冒険談を語り、女性が活躍する中国の民衆説話「花木蘭」や女性詩人蔡琰の「蘆笛の歌」を語りなおすことによって中国系アメリカ人女性が発言する場所と力をえてゆく過程を描く。その成長過程は、サンフランシスコの郊外ストックトン (Stockton) で育ったキングストンのビルドゥングスロマンとして読める。次にキングストンは『アメリカの中国人』 (*China Men*, 1989) で曾祖父、祖父、そして父親がハワイ・オアフ島、シエラネヴァダ山脈、ニューヨーク、そしてストックトンでそれぞれ移民労働者としてどのような歴史をきたたか語る。挿入された短い逸話は、人が人里をはなれて未知なる場所に迷いであることの危うさを暗示する。作家にとって場所がいかに重要であるかをキングストンは次のように言う。

場所の感覚は全てに関係する。たぶんシェークスピアの『あらし』だと思うが、多くの助けと靈感を与えてくれたモットーの一つは、彼が非現実的なものにローカルな住みかたと名前を与えるのが作家や芸術家の目標の一つだと言ったことです。(Skenazy 112)

都市のゲットー化により、「美しくもなく、知的でもなく、生命に危険が及ぶこともある」(Skenazy 114) 故郷ストックトンの町が彼女に作家としての責務を自覚させたことを語る。

わたしが常にストックトンに帰ってくるのはそこに両親がおり、わたしの文化的根があり、兄弟姉妹がいて、わたしのチャイナタウンだからです。……たぶん作家が育つ場所として世界で一番適切な場所でしょう。というのはわたしのまさしく目の前で人類が直面しているもっとも困難な問題がおこっているからです。いかに生きるべきかを考えねばならない。…大きな問題はこのような場所からどのようにコミュニティを作るかということです。(Skenazy 114)

キングストンにとってストックトンについて語ることは自分の出自と家族の歴史と同胞の人びとについて語ることである以上に、物語ることによって故郷を記憶するという目的がある。彼女の思いが強いのは1970年代に高速道路の建設でチャイナタウンが崩壊してしまったからである。

人びとはちりぢりに散った。そこには共同体の精神がのこったが、場所があるからではない。…だから場所をもはや持たない共同体とはなんであろうか。…それは心や精神の場所ではないでしょうか。わたしたちの仕事は場所によってではなく想像力と知識と歴史によって共同体を維持してゆくことではないでしょうか。(Skenazy 114-15)

スチュワート・ホール (Stuart Hall) は、均一化されたグローバルなマスカルチャーに対抗するものとして人びとがそこから語ることでできるローカルでマージナルな場所との関係をエスニシティと捉えている。

エスニシティとはそこから人びとが発言するために必要な場所あるいはスペースである。それはこの20年を変えてしまったローカルでマージナルなすべての運動の誕生と発展においてたいへん重要な瞬間である。それは私たち自身のエスニシティを再発見する瞬間でもある。(Hall 36)

発言するとはある場所からなされることであり、それはその場所との関係において自分がだれであるかを語ることだとホールは示唆する。彼のいう「ローカルでマージナルな」場所とは、ホミ・バーバ (Homi Bhabha) が異種混交的な「第三のスペース」と名づけるものに近いだろう。

わたしにとってハイブリディティの重要性は、第三のものがそこから生まれてくる二つの起源をたどれるということではなく、むしろハイブリディティとは他のさまざまな立ち位置が誕生する「第三のスペース」であることである。第三のスペースはそれを構成している歴史そのものを転置させ、権威や新しい政治的主導権の新しい構造を打ちたてる。(Bhabha 211)

環境批評を論じるローレンス・ビュエル (Lawrence Buell) は、ホールのいう「ローカルでマージナルな」場所やバーバのいう「第三のスペース」がグローバリズムによって場所の「多層的なヴィジョン」(96)をもつと暗示する。グローバリズムが特定の場所を抑圧する力として働くことを認めつつ、ビュエルは『環境批評の未来』で西インド諸島出身のデレック・ウォルコット (Derek Walcott) の作品『オメロス』(Omeros, 1990) にローカルでありなおかつグローバルな多層的な「場所性」(94)を指摘する。

文学において場所のグローバルな感覚のようなものが生まれている。……多層的な意味とは、知性的に歴史的にそして文化的にローカルであり、国家的であり地域的でありそして地球規模的であるということである。…こ

のようなポストコロニアルな多層的なヴィジョンはローカルな文化の変化をこえて長く生き残るに違いない先見性をうみだしている。(92, 96)

ビュエルのいう多層的な「場所性」は移民やディアスポラたちの「多音的」で「多地域的」な「新しい場所的アイデンティティ」(92)を構築している。ローカルでありまたグローバルでもある文化が交差する場に保持される, そのような柔軟で流動的な「場所的アイデンティティ」をキングストンも共有している。彼女はアジア系の占める場所／スペースの変容が, 彼らに多義的なアイデンティティを与えていること, そして彼らのエスニシティが環境の「多層的なヴィジョン」によって生み出される場所の開放性に根ざしていることを描く。

2. 「わたしたち」の歴史とチャイナタウンの再創造

『女武者』はビュエルのいう多層的な「場所性」をアジア系／中国系アメリカ人が占める空間としてキングストンが再発見したことを示唆する。彼女はアメリカの明快な, 理解可能な社会への同化を切望し, 自らのルーツであるチャイナタウンやそこを象徴する母親の「謎めいた」世界からの脱出を願いつつ, 一方でその場所こそ自分が帰るべき場所であるとも考える。副題が「ゴーストたち(鬼)の中で過ごした少女時代のメモワール」とあるように, 『女武者』は祖国から切り離された者たちの間で過ごした少女時代の記憶であり, 彼女の出自が記憶をたよりに語りなおすことによってしか存在しないものでもあることを示唆する。キングストンは, アメリカの理解可能で, 明快な社会を *no ghosts* の世界という。その社会は, 一方で人工的な様相を呈する社会でもある。「世界を論理的に眺めたかったので, わたしは家を出た。論理, 新しい視点。わたしは不可思議な事象はなにかを解明するためにあるのだ, ということ学んだ。わたしは簡明なことが好きだ。…プラスチックや, 元素周期表や, グリーンピースと賽目の人参のつけあわせがついただけのTVディナーがあればいい。暗い隅々に光があふれるように流れ込んで。鬼はいない。」(262) 彼女は

二つの世界の狭間にいる。居場所を見いだせないキングストンはアメリカ社会で居ごこちの悪さを感じている。「アメリカでのわたしの人生は、ずっとひどい失望ばかりだった。」(64)

『女武者』は、自己形成の物語にとってその自己の成長をささえる共同体、コミュニティが必要であることをくり返し強調する。『女武者』の「白虎」(White Tiger)の女武者花木蘭の脚色された話も匈奴に捉えられた実在した詩人蔡琰の物語もホームカミングの物語である。中国の民衆説話の木蘭は成人した息子のいない父親のために男装して君主につかえる女性であるが、キングストンの「白虎」では手柄をたてて息子の待つ家族のもとに帰還する母親として描かれる。蔡琰は195年ごろ蛮族である匈奴に捕らえられ二人の子供をもうけ、12年後再び中国・漢の国に戻された。異国の地でうたう望郷の歌が蛮族の心を打ったとキングストンは語る。もはや起源となる共同体や場所を回復することはできないが、語ることを通じてそのような共同体や場所の構築が、自己形成と不可分であるとキングストンは示唆している。

『女武者』のあと、キングストンには語りの変化があった。『女武者』では一人称の「わたし」の視点をとっていたが『アメリカの中国人』から『トリップマスター・モンキー』(*Tripmaster Monkey*, 1989)では、全知の語り手が語る。視点の違いについてキングストンは次のように述べる。「『女武者』は彼女自身が成長しようとする若い女性の物語で、…『アメリカの中国人』は男性を客観的に見ることのできる成熟した人の物語です。」(Skenazy 36) さらに『アメリカの中国人』の語り手は、人びとの話を聞く人でもある。それについてキングストンは、「『アメリカの中国人』は男性についての作品にする予定であった。しかし「わたし」の視点からしか書くことができなかった。ところが執筆している間に時がすぎ、「わたし」が消えはじめ、最後に彼女は聞き手になっていた。」(Skenazy 81)聞きとった事柄を報告することによってキングストンはチャイナタウンの住民が共有する声を獲得したと自信をもったという。「わたしが「わたしたち」と言えるのですばらしいと感じる。わたしはついにコミュニティ

を理解し、「わたしたち」とはだれかを知ったのだ。コミュニティ (communal) の人びとの声とともに語ることに自信をもった。」(Skenazy 82)

キングストンが「わたしたち」の視点で描いた『トリップマスター・モンキー』の背景はサンフランシスコのチャイナタウンである。物語は60年代の公民権運動とベトナム反戦運動を背景に、中国系5世代の若者ウィットマン・ア・シンがチャイナタウンで劇の上演を成功させる奮闘期である。ウィットマンの名前が示唆するように「わたし自身を歌う」の詩人ホイットマンが背景にあり、キングストンは詩人がしたようにウィットマンに彼の「アジア系アメリカ人性」を考えさせるのである。さらに表題の「モンキー」は彼が中国の古典『西遊記』の变幻自在なアメリカ版孫悟空であることも暗示している。「本当だよ。僕は現代アメリカの猿の大王の再来なんだ。」(33) 彼は誰でも参加できる開かれた劇空間を創造し、それこそが共同体の基本であるという。「僕は排除されたものは何でも、そして居場所のない人はだれでもうけ入れる。」(52)「彼はコミュニティをこのように定義した。コミュニティとは一回限りでできるものではなく、人びとが想像しともに参加し、そして再創造するものだ」と。(306)

この祝祭的色合いの濃い劇空間は、ベトナムで戦われている戦争と対比される。「世界は崩壊しつつあった。…死にかけているのはこの惑星のアジアの側で、一方、愛に基づいた世界観を訴えるヒッピーたちの集会で自由に活動しているのはこちら側、つまりアメリカ側だ。」(306) サンフランシスコのチャイナタウンが海を越えたアジアとの結節点として開かれた場としてたちあがる。このような開かれた語りを展開するのはキングストンもいうように、観音菩薩のような女性の語りである。「まず、全知の語り手は女性です。そして彼女は中国にさかのぼる記憶をもっている。…ベトナム戦争終焉までの記憶をもっている。彼女はときどきウィットマンにたいへん厳しく、彼をとらえます。…つまりわたしの語り手が観音菩薩であることを理解しはじめました。」(Skenazy 88) 彼女は、「ローカルでマージナルな」サンフランシスコのチャイナタウンがアジアの殺戮の悲劇への反転した世界であることを示す。

3. チャイナタウンを超えて

『平和の第五の書』(*The Fifth Book of Peace*, 2002)は1991年10月のオークランド・パークレーの火災によってキングストンの自宅が焼失した顛末を語る一人称のメモワールと、その後のウィットマンと彼の家族のハワイでの暮らしを描いたフィクションが併置されている。作品は4章に分かれており、第1章「火」(Fire)は中国にあったという3冊の平和の書を念頭に執筆していた『平和の第四の書』の原稿を、焼失した自宅のなかに探し求めたことを記す。第2章「紙」(Paper)では、中国にあったという3冊の平和の書を求めて、人びとに聞いたことを記す。第3章「水」(Water)は、ハワイに渡ったウィットマンとその家族がベトナム戦争を背景にどのように反戦運動にかかわったかを描く。最後の第4章「大地」(Earth)はベトナムの帰還兵を中心にこれまでアメリカが関与した戦争に従軍した人びとを集めて、彼らの体験記を書くワークショップの報告である。

作品の背景は、多くの場合キングストンが住居としているカリフォルニアのパークレー・オークランドと家族で17年間を過ごしたハワイ・オアフ島である。しかしながらこれまでの作品と異なる重要な点は中国系の文化的背景や具体的な場所を基盤としない脱領域的な共同体を志向している点である。それはキングストンが執筆していた『平和の第四の書』の原稿が火災によって焼失し、それを蘇らせるには、回りの多くの人びとの支援が必要だと彼女が思索した点にある。焼け落ちた書齋を目にして、彼女は孤独な執筆活動の意味を問う。「作家の生活につきまとう孤独さはもう望まない。一人ぼっちになりたくない。わたしには同じ心をもったコミュニティが必要だ。平和の書を再構築するためにはコミュニティが必要だ。」(62) 特定の場所に根ざした共同体ではなく、同じ志をもった人びとが集まることによってできる場を重要視している。しかしながら、それがうまく機能しない場合もある。第3章の共同体は、ウィットマンと家族がハワイ・オアフ島で無許可離隊者(AWOL)や徴兵忌避者を支える反戦運動に参加する人びとの集まりである。当時ハワイはベトナム戦争の最前線

地帯であった。兵士たちを支援する活動を通じてウィットマンは20歳前後の兵士たちがアメリカの軍事政策について考えるにはあまりに未熟なことを思い知る。彼らはやがて軍に戻り、ウィットマンたちの平和活動は十分に成果を収めることはできなかった。

キングストンが唯一平和への希望を抱いたのが第4章「大地」で描かれる戦争を体験した人びとのワークショップである。特定の場所を共有しているわけではないが、彼らこそが平和を求める「同じ心をもったコミュニティ」として描かれている。「わたしたちはコミュニティで書く練習をする。ひとりで書く必要はない。ともに書きそして互いのために書く仲間がいた。」(*Veterans of War* 2) 彼女はあるワークショップで女武者の「木蘭の歌」を紹介し、かつて木蘭の物語を女性解放の物語と考えていたが、今、それは兵士たちに女性的なヴィジョンを与えるホームカミングの話であると説く。「花木蘭は戦争から軍隊を帰還させる。彼女は男性から女性に彼女自身が変貌したことを隊の兵士に見せることで、彼らに女性的なヴィジョンを与えるのだ。」(390)

『女武者』で人種差別と女性差別に対して闘う手本となった女武者は、帰還兵とのワークショップで彼らの話を聴き、彼らの心を癒す女性へと変化している。ワークショップを通じてキングストンの周りに「同じ心をもったコミュニティ」が出現するのである。『女武者』と『アメリカの中国人』ではチャイナタウンが中国系の出自を支える場であることを描き、『トリップマスター・モンキー』ではそのチャイナタウンがアジアとの重要な結節点であることを示し、そして『平和の第五の書』では特定の場所を占有しない脱領土的な「同じ心をもつコミュニティ」の可能性を示唆している。キングストンにとって重要な場所とは歴史文化的な背景をもつ具体的なチャイナタウンから、流動的に変貌する多民族社会としての開かれたチャイナタウンへ、そして特定の場所とエスニシティの桎梏を越えて人びとが創造的に作り出す空間へと変容している。このようにキングストンの場所をめぐる想像力は彼女の創作の重要な一面を占めている。

引用参考文献

- Bhabha, Homi. "The Third Space: Interview with Homi Bhabha." Ed. Jonathan Rutherford. *Identity: Community, Culture, Difference*. London: Lawrence & Wishart, 1990. 207-221.
- Buell, Lawrence. *The Future of Environmental Criticism: Environmental Crisis and Literary Imagination*. Oxford: Blackwell, 2005.
- Hall, Stuart. "The Local and the Global: Globalization and Ethnicity." Ed. Anthony D. King. *Culture, Globalization and the World-System: Contemporary Conditions for the Representation of Identity*. Minneapolis: U of Minnesota P., 1997. 19-39.
- Kingston, Maxine Hong. *China Men*. 1980. New York: Vintage, 1989. (藤本和子訳『アメリカの中国人』晶文社, 1983)
- _____. *The Fifth Book of Peace*. New York: Knopf, 2003.
- _____. *Tripmaster Monkey: His Fake Book*. 1989. New York: Vintage, 1990.
- _____. *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood Among Ghosts*. 1976. New York: Vintage, 1989. (引用は藤本和子訳『チャイナタウンの女武者』晶文社, 1978により頁数を記した。)
- _____, ed. *Veterans of War, Veterans of Peace*. Kihei, Hawai'i: Kao Books, 2006.
- Skenazy, Paul and Tera Marin, eds. *Conversations with Maxine Hong Kingston*. Jackson: UP of Mississippi, 1998.

Ⅲ 汚染の言説と環境文学 —

Susanne Antonetta, *Body Toxic: An Environmental Memoir*を中心に

伊藤 詔子

1. 作家と作品の概要

『汚染の身体——環境的追想記』(*Body Toxic: An Environmental Memoir*, 2001. 以下副題は省略する)の著者スザンナ・アントネッタ(1956-)は、イタリア系移民第4世代の詩人で、病の中活発に作品を発表している作家である。表題作品のほか、詩集 *A Mind Apart: Travels in a Neurodiverse World* (2007) などもある。汚染文学の代表的作品である本書は、アメリカ各地で DDT の撒布が吹き荒れた 50 年代生まれの作家が、母親の胎内ですでに、身体の根源としての子宮で汚染が浸透し、汚染のトラウマが生命の始まるときにおいて始まったことを、メモワールとして語るすぐれた環境文学である。

本書はアメリカの環境文学の教室のシラバスで、ウィリアムスの『鳥と湖と砂漠と』(*Refuge: An Unnatural History of Family and Place*), リンダ・ホーガンの『太陽の嵐』(*Solar Storms*)と並んでよく読まれている作品で、筆者もシラバス web からこの大切な作品を知った。カーソンの衣鉢を継ぐ現代女性環境作家の1人でもあり、土地の汚染と癌の関係をテーマとしている。ただし汚染源は農薬よりも核物質など有害化学物質であり、そこにこの作品の新しさがある。そして『汚染の身体』は、汚染の浸透する身体の歴史を、病の中から12章でかたるが、追想は、次第に過去にさかのぼるかと思えば作者の10代を形成した60年代を軸に螺旋状に展開しながら、作者が生まれるずっと前の、4世代の移民のサーガとアメリカ史を交錯させて進む。2世紀の時間を交錯させながら語られる沈黙と貧困の移民家族、アントネッタ家の歴史は、第1章「言葉」で以下のように語り始められる。

散々迷った挙句、沈黙が本性の祖父はアメリカにやってきた。彼はバルバドスの暑いうるさい島を後にした。いつやってきたかは誰も知らなかったが、祖父は黙っていたかったから、安らぎを求めてここにきたのだ。お茶らしい色をしたお茶を飲むため、土曜日には、祖父が死ぬまでずっと見ていた「ムササビと間抜けな鹿」のような漫画を見るためにきたのだ。彼は結婚してやはり沈黙が本性の私の母の父となり、ここアメリカが、此れでもなくあれでもない、世界のどこでもない国、これまでいたバルバドスでもヨーロッパでもなく、アジアでもアフリカでもなく、お茶らしいお茶を飲み、猿や何百も芽の出た焼きジャガイモのようなひどい食べ物から抜け出せるところだと思ってやってきたのだった。(Antonetta, 1)

このように、曾祖母はイタリアから、曾祖父はカリブのバルバドスからの移民の歴史を当初から決定付けたのは、寡黙な一族の英語との格闘でもあった。一家はニュージャージー州南海岸のホーリー・パーク (Holly Park) に格安の土

地を入手し、バンガローを建て夏場の住居とする。しかし4世代目の詩人アントネッタは、有害化学物質汚染による酷い病状、祖父によるレイプ、両親の病への無理解、ドラッグと四重苦のなかで十代を送り、11歳より32歳までつづった日記に、沈黙の家族のストーリー、汚染の深化、一家のアメリカン・ドリームの追及プロセスとその実相が描出される。

上の引用にあるアメリカの別名「反場所」(anti-place)は、すでに厳しいパラドックスにおかれている。祖父にとってアメリカは場所というよりは、どこでもない場所、ひどい貧困から抜け出せる理想の地、つまり人間らしい暮らしの約束されたところであった。同時に1章後半のストーリーからわかるが、反場所は「人間らしい暮らしの約束されえないところ」の含意をもっている。ローレンス・ビュエルは、『環境批評の未来』第3章で、場所を place, non-place に分け、故郷のような愛着のある場所を place, 空港のような通り過ぎるだけの場所を non-place と区分した。われわれはここに、収容所や戦場、そして身体を破壊するほどの汚染の場所としての anti-place を加えねばならない。この新しい場所性は、作品が次第に映し出す『核の西部』(*Atomic West*) をかかえる騙し絵的アメリカの姿である。

2. 語りの技法としての追想

この作品を文学作品として成熟させているものとして、フラッシュバックとインターテクチュアリティの技法があり、汚染が人間に与える影響が、いかに歴史的に構築されていくか、複雑に綾なす個人、家族、国の三層の時間が、21世紀に向けて生きる詩人個人の身体に、汚染という歴史を書き込んでいったかを語る。汚染の結果の苦しみの中で、語り手が個・家族・国を貫く時間を発見しようとしていることがみてとれる。また汚染への認識は、トラウマのように突然よみがえる生々しい記憶によって、時間を置いてある日啓示のように、身体内部に、呼び起こされるものであることを見事に描出している。

第4章「走る足」では、信じがたい汚染がもたらした苦痛の記録として著者

はこの書を『アンネの日記』と呼ぶ。そこには国家の専制への恐れと、その家庭内での反復でもある、母親や女性の子供が父権的な祖父や父のもと、英語のしゃべれない移民一家の特徴でもある沈黙を強いられるなか、家族からも病への無理解と孤立を余儀なくされドラッグにはまっていった少女の、隠れ家での手記の意味がある。誰にも読まれずホロコーストの後発見されたという形をとりたいとする願望があるとともに、民主主義国家アメリカが、語り手にとってはナチの専制と同様のホロコーストの恐怖を与える、人命軽視の汚染を容認する国と映るのである。作品はしばしばイタリックスの日記の部分を含んで上にアメリカの歴史への言及、下に家族史またはその逆がくる三重構造となっている。これらの層は相互に反射しあう構造となっている。この三層構造は、この作品の多くの部分を占める汚染物質の医学的解説の場合もくりかえされるが、「被曝母体内に最高濃度のDDEが母乳中にあると思われる。1950年代のほとんどの女性とは違い、また自然というものが嫌いな母らしくもなく、母は母乳で育てた。」「母乳とDDEが私の最初の人間としての食事となった。身体が復活するとき、罪とともに、評決の部屋に一緒に持ち込まれる。ペテロは罪悪、恩恵、殺虫剤、放射線を評価する」(85)とあるように、個と家族と国の三層構造を結合しているのは、汚染物質でもある。

一家が夏を過ごしたホーリー・パークには、世界最大規模の多国籍化学会社チバガイギー(Ciba-Geigy)があり1952年~66年まで、トム川に、今ではアメリカの風景そのものともいえるDDT、トリチウム、クロルデン、ベンゼンおよびプルトニウムなど核を含む有毒化学物質の廃棄物1万4千バレルが海岸に放置され、無数のドラム缶は腐食し、大気、地上水、土壌、地下水に信じがたい汚染を長年浸透させた。続く91年までもチバガイギーは、25年間、大西洋に10マイルのパイプをしいて未処理廃液を投棄し続けた。一家のバンガローから2マイルのオイスター・クリークでは、核燃料工場の放射性物質含有廃液が捨てられ続けた。その結果アメリカ国内のみならず世界で最も忌まわしい巨大汚染の場所に指定され、大規模環境災害 Superfund Site (1980年制定大型

放置有害産業廃棄物除去基金) 対象となり, NPL (National Pollution List) に指定され現在も浄化作業が続いている。冷戦期この場所は西部での核プラントを支えた核燃料製造の地でもあり, NPL というのはすなわち NSZ (National Sacrifice Zone) でもあった。50年代の冷戦構造の始まりに語り手はうまれ, その人生は汚染の悪化をたどったアメリカの動きとぴったり重なる。

3. 作品の歴史感覚

第7章では, 50年代のミサイル防衛への国民的熱狂を回想する。個人のレベルで進行した汚染による病の浸潤について, いかにかがケネディの時代と市民権運動と暗殺, 危険な薬品の流布など国家的レベルでも同時進行したかが語られる。

月面着陸, 発電所(ニューワークとエリザベス)暴動, ケネディとマーティン・ルーサー・キングが死んだ翌年, そしてサマー・オブ・ラブの1969年で, 私は, マリファナ, ハシシ, スピード, 鎮静剤, LSD, メスカリン, ペヨーテを知った。リチャード・ニクソンの治安維持強化要綱で1968年の選挙が行われ, 「遮断作戦」によってメキシコから合衆国へのマリファナ流入が止められた。マリファナは明らかに危険だが, それは, 植物そのものからくるのではなく, 植物への散布に使われる除草剤パラコートからくるものだ。私の脂肪組織にはDDEがあり, 骨には鉛, 水銀, ダイオキシン, PCB, ヨー素-131, ストロンチウム-90がある。私は3H2Oだった。(158)

このもっとも内密なノートには, ファシズムの専制と軍事行動に対抗して「ヨーロッパを開放するため」第二次大戦に参戦し, 戦後の新しい世界秩序を目指す冷戦期のアメリカを支えるエレノア・ルーズベルトの写真がついている。しかし冷戦期のアメリカが, 語り手の幼年時には認識されえなかった秘密裡の核開発で, 汚染が深く進行していったことは, 個をこえた国の歴史と重ね

て把握されている。エレノアの反ファシズムへのクルセイダーは、核軍備に走った50年代アメリカを支えた心情でもあり、時代の雰囲気は軍拡一色にいろどられていた。Garden Stateと呼ばれ、文学のかぐわしい舞台ともなってきた牧歌的避暑地で三世代の一家が夏場を過ごし水泳を楽しんだトム川での追憶、ポッター入江での蟹採りや砂地でのベリー詰みとともにメモワールは進行するが、危機はいったんは達せられたアメリカン・ドリーム of 虚偽性への認識により深いトラウマとして感覚され、ナラティヴと違い、経験の時間と記憶される時間差を特質とするメモワールとして語られるところに深い意味がある。

第11章「ラジウム・ガール」では、現代の核汚染の根源を、ニュージャージーに1920年代、ラジウム工場ができた時点にまでさかのぼる。その後のアメリカの繁栄と、作者が生まれた50年代から90年代まで歴史が身体に汚染として刻まれていく形で、国家の記憶、家族の記憶、個人的な身体 of 記憶が、三重の時間的ズレを孕みながら、一つの環境的追憶と重なってくる。汚染の結果が語り手に60年代から70年代にかけて発現する前、浸透の長い欺瞞的歳月が流れ、結果が病となって現れた後、牧歌的風景の意味がことごとく塗り替えられ、すべての思い出のシーンが、折り重なっただまし絵から真実の映像がたち現れるように立ち上る、いわば恐怖の語りともなっている。一家 of アメリカン・ドリーム of 実現が、実は汚染が不妊と身体と精神を不治の病へと蝕む歴史でもあったことを、混濁した意識 of フラッシュバックによって、突然よみがえる生々しい記録、幻覚の再発、トラウマとなっている経験 of 強烈で鮮明な記憶として「私の体にどんなことが起こったかは誰にも説明できない。どんな人に起こっても、それは誰にも説明はつきはしない。多くの脳障害が子供たちに起こり、図りきれないほどの有毒物質が空気中に放射線を撒き散らした。私の身体 of あらゆる生命システムは破壊された。不整脈の心臓、膠着した脳、酷いアレルギー、無用の生殖器。この身体、それはソドムでありこれは神 of 憤りあるいはそれは人の憤り、無思慮で愚かでしかも神よりも不変の」(196)と語る。

最後の3つの章「ラジウム・ガール」「核の鏡に映した自画像」「エピローグ」

では先祖の国、イタリア、ヨーロッパ、西インド諸島への旅、アメリカ各地の核関連施設、トリニティサイトの原爆製造地、ヤッカマウンテンなどへの言及が時間と空間を越えて次第に一つの意味へと収斂し、語り手は自身の存在の意味を二十年代のラジウム・ガールと重ねる。それは自らが歴史を貫く存在として彼女らの一族だという思いとともに、口に含んだラジウムが、少女たちの身体を光らせたように、苦痛をもたらす自分の身体の汚染を汚染源であるラジウムが可視化するように、テキストに書き込みたいとする願望であるともいえよう。ここでは歴史の中に透視する身体風景の内部から、汚染された身体と精神の苦痛が汚染そのものによって浮かび上がってくる。その恐怖は一種の汚染ゴシックのような雰囲気さえ持ち、環境文学が新たな段階に入ったことを実感させるものである。

4. これまでの評価

ニューヨークタイムスで書評したマイケル・ポラン (Michael Pollan) によると、「アメリカ作家が構築してきた風景と場所と心理との間に引いていた線を完全に打ち砕き、彼女は両者の関係を設計しなおすのである」とする。環境文学の道を切り開いた『沈黙の春』 (*Silent Spring*) および『われらをめぐる海』 (*The Sea around Us*, 1951: rep. 1961) の予言の射程は、科学的にも修辭的にも二つの方向で拡大していったが、そのひとつはカーソンが先駆者となった環境の病としての癌の捉え方である。癌は、フェミニストたちが作成した記録映画のタイトルにちなみ「レイチェルの娘たち」と象徴的によばれる、現代の女性環境作家たち、テリー・テンペスト・ウィリアムス、サンドラ・スタイングレーバー、スーザン・アントネッタらの中では、単に一つの病ではなく、汚染に蝕まれる身体が文化的社会的構築物であるとの認識を深め、その見えにくいネットワークを解明するときの豊かな表象性を担っていった。いまひとつの方向は『われらをめぐる海』の1961年の再版で、太平洋マーシャル諸島ビキニ環礁における核実験による、海の核汚染という新しい問題であった。序文でカ

ーソンは、詳細に海洋への「汚染廃棄物、高・低レベル放射性廃棄物投棄による放射性汚染物質の海の生き物および全世界への影響」(Carson, 1961 xi)について警告を発している。アントネッタは、「カーソンの『沈黙の春』の啓示の一つに、放射線と化学薬品汚染が同じ場所にあると互いに影響を強めあうという点がある。体内では細胞構造とDNAを攻撃し生体防御を衰えさせる。侵略性の強い癌に使う放射線化学療法のように、健康体に直接向かう」(Antonetta 139)と書いている。カーソンは『沈黙の春』でも、第14章で、まさに母乳の核汚染をテーマとしている。ラジウム・ガールとは、1920年代アメリカ最初の放射性物質汚染事件の犠牲者とされる。ニュージャージー州で、兵士の文字盤に蛍光剤として、口に含んだ筆でラジウムを塗る作業に従事してラジウム工場で働き、後年癌に苦しみ訴訟中に亡くなったラジウム・ガールと呼ばれる少女たちと自分の運命を重ね、暗い裁判所に立つ女性達の姿と自らの汚染の身体の歴史的連続性をイメージとして喚起するところに、特にこの作品の透徹した歴史観が窺われる。

フレデリック・ビュエルのいうように、いまや汚染の感覚は内面化し、自伝、環境文学、告白小説の混交したこの作品の新鮮なジャンル性が、多くの読者を引きつける理由であろう。この作品は、理路整然とデータを並べる科学的記述へはもちろん、風景と自己との一体化を歌い上げる従来環境文学的ナラティブへも挑戦するものであり、とりわけアメリカが生み出したジャンルである、パストラルな風景に自己を浸透させるネイチャーライティングの伝統が不可能なアメリカを提示している。

(本論は、汚染と女性環境文学全体を論じる拙論「汚染の身体とアメリカ——ジェンダーで読む現代女性環境文学」の一部と重なりがあることをお断りする)

引用参考文献

Antonetta, Susanne. *Body Toxic: An Environmental Memoir*. Washington D. C.: Counterpoint, 2001.

Buell, Frederick. *From Apocalypse to Way of Life: Four Decades of Environmental Crisis in the*

U. S. New York : Routledge, 2003.

Buell, Lawrence. *The Future of Environmental Criticism : Environmental Crisis and Literary Imagination*. Oxford : Blackwell, 2005.

“Rachel’s Daughters : Searching for the Causes of Breast Cancer” DVD A Light, Saraf, Evans production, 2002.

伊藤詔子「汚染の身体とアメリカ——ジェンダーで読む現代女性環境文学」『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア—田中久男教授退官記念論文集』（南雲堂，2009年10月）所収。

おわりに

以上の論考は、まず19世紀における埋葬方法に見られる死生観の差異とその意味を考察し、つぎに現在のエスニック・コミュニティの新たな変容を展望し、そして世界と身体と汚染の歴史的連続性を明らかにした。各論考が対象とする作品の時代背景とテーマは異なるが、すべての論考が場所と人の営みの深い関係への関心に貫かれていることは共通する。文学と環境の関係を研究すると広義に定義されるエコクリティシズムの柔軟さは、環境的表象を通じて19世紀の文学から21世紀のメモワールまでを批評対象として読み解けることを示せたのではないかと考える。テーマや方法論に柔軟性があるということはエコクリティシズムが環境批評へとその批評理論を確立しつつあるということである。ポストコロニアルの問題系に環境を読み込もうとするポストコロニアル環境批評の萌芽もあり、エコクリティシズム／環境批評は今後アメリカ文学とともに世界の英語文学へと対象を広げる文学批評になると予想される。さらにこの共著論文をもとに論考を発展させることによって各々の研究は、環境批評とともに環境を共通のパラダイムとして19世紀アメリカ文学研究、アジア系アメリカ文学研究、そして汚染の言説研究として学際的な研究とその方法論に寄与するであろう。

[付記] 本論考は、松山大学特別研究助成（2007年度）による研究成果の一部である。

（吉田美津）